

「被爆体験記」

坂元 浪男（旧姓：荒川）

なぜ我々が毎年、毎年全世界に向けて平和を訴え続けているのかは、人類に向けてはじめて原爆が投下された世界に2ヶ所しかない広島長崎の被爆地で被爆した1人であり、その現場を、この目で、この体で体験しているからです。私は当時15才で三菱電機長崎製作所の養成工で学習（旧長崎高商）と実習（城山二丁目）3日間の交替制で当日は実習日でした。

朝、実習所で当日分工場（日見トンネル内）に配属される先輩達の用事で養成工10名が先生に引率され、電車に乗って本社まで行きました。用件も終り先輩達の荷物を運搬するため寮まで行くトラックの荷台に乗って、先生のこられるのを待っていた時の出来事でした。凄まじい爆音、夏の空よりも明るく目もくらむ程の閃光と共に一塵の強い熱風で体毎、吹飛ばされそうなのを、トラックの荷台にすがりつき何事かと、上空を見上げると、太陽の光をもさえぎる程の真白い煙か・・・光で覆われた下の彼方から炎が立ちこめ、事の異変におどろき、とっさにトラックの下に潜り頭をかかえうつ伏せていました。それからどれ位たったのか、5分・・・10分いやもっと短かかったかも解りません。辺りの静けさを打破るかの様に敵機襲来のサイレンが鳴りひびくその中を先生が大声で工場内の防空壕に避難するよう誘導され、全員が無事に退避出来ました。防空壕の中で会社の人達が8月6日広島に投下された新型ラッカサン爆弾と同じやないかと話しておられました。

壕の中で数時間経過した後、先生の判断で寮に帰る事になりました。道路も寸断されている中を徒歩で平戸小屋町より山裾づたいにトボトボと歩いて帰りながら、周辺の余りにも悲惨なありさまに、目を覆い足がすくんでその場にしゃがみこむ学友もおりました。

やっとの思いでたどりついた寮（城山一丁目）跡かたもなく全焼、実習所も全壊しており、押しつぶされた屋根の下には生存者がおり休む暇もなく救出作業に取り組みました。その夜は泊る場所も、たべるものすらなく、畑にあったカボチャを水で炊いて空腹をしのぎ、畑に植えてあったホーキ草を下敷として野宿となりました。

夜明をまって救助隊の指揮で押しつぶされた屋根の下から級友の遺体搬出作業に取りかかり、変りはてた友を数名で抱きかかえ実習所広場に敷き並べたホーキ草の上に安置して、広場に廃材で井桁を作り遺体を乗せそれを3段に作り井桁の周囲を板や木片で囲い、全員が頭を垂れ合掌の中で火を放ちました。パ

チ、パチの音と共に炎が次第に大きくなるにつれ井桁の隙間から先輩や級友の姿が炎の中で崩れ行くありさまを、火の粉をあびながら誰1人として微動だにせず立ちつくしておりました。

3日間昼夜を問わず連続で作業をつづけるかたわら、全焼した寮の焼あとより遺骨の回収作業も行いました。寮および実習所で被災された約150人程の遺骨を会社より持参された、白木の箱におさめ会社の会議室に祭り終戦をむかえました。

都城より5名、高崎より4名、はてしなき夢大いなる将来への希望をえがきもとめながら長崎まで行った少年9名中3名は、紅蓮の焰の中で崩れ行き白木の箱の中となり友の胸に抱かれ、又他の3名は当日の爆風で負傷しながら不自由な我が身もかえりみず、みんなで力を合せ励ましながらすしづめの客車、貨物車果ては機関車にまで乗りついでやっこの思いで我が家にたどりつきました。終戦からすでに50余年ともすれば記憶もうすれがちな、この体験しっかりと心にきざみこみ夢なかばにして散り行き友のぶんまで生きながらえて折にふれ戦争の恐ろしさ、核兵器による結果の悲惨さ、いかに平和が大切かを子孫に語りつぎたい。